○**タイトル**　『甲子園を目指さない』

○**著者名**　太田　純平

○**あらすじ（１２７文字）**

高校の弱小野球部が、中学生との試合でボロ負けする。すると直後の部室でキャプテンの与座が「俺たち甲子園を目指すのをやめよう」と一同に告げる。与座の「楽しく野球をする」という方針に多くが賛同する中、四番エースの乃村は反対。部活どころか野球をやめると言い出す。

○**特記事項**

私は高校で野球部に入ろうと思ったのですが、そこそこの強豪校だったため指導も厳しく、野球漬けの毎日を送る実力も勇気も無かったため、別のゆるい部活を選んだという経験があります。この、野球が好きだし、仲間と野球をやりたいけど、ガチで甲子園を目指すほど練習はしたくない。そんな「楽しく野球をやろう」という方針を掲げる高校が世に出てきてもいいんじゃないか、という提案も含めて書きました。

○**本編文字数**　４９８４文字

甲子園を目指さない

太田　純平

ランナーの乃村は、二塁ベースの上で腕組みをしていた。憮然とした表情で俯いている。もはや戦意が無いのかリードさえしない。

相手の投手が振りかぶる。

バッターが空振り三振。

「ゲームセット！」

審判役を務めていた先生の声が、夏の午後のグラウンドに響いた。

乃村は本塁に集まりながらスコアボードに目をやった。

１対１８。

高校と中学の試合。勝ったのは中学生だった。

集まった先輩たちを見て、中学生がなんとも言えない顔をする。喜んでいいのか、悪いのか。

「礼！」

先生の号令で一同が頭を下げる。

顔を上げた時に高校生で笑顔だったのは、遊撃手のガクちゃんだけだった。

「楽しかったね」

ガクちゃんがナインに言った。

みんな苦く曖昧にうなずいた。

乃村だけは違った。彼はキッとガクちゃんを睨んだ。エラーをしておいて何を言う。そんな責めるような眼差しだった。

「ちょっと話がある」

キャプテンの与座がみんなに言った。

＊　　＊　　＊

部室に野球部一同が集まった。

もわっとした空気に制汗スプレーの人工的な香りが混ざる。

一人そそくさと着替えていた部員の星野がぽつりと言った。

「僕、塾あるから先に」
「お、おう」
与座は無理に引き止めなかった。
星野が部室から出ていく。丸い眼鏡を掛けた彼のあだ名は“教授”。学年トップクラスの秀才だった。
与座が改めて一同の前に立った。
「みんな、ちょっと聞いてくれ。先生とも話し合って決めたんだけど……」
与座は一度、言葉を切った。
「俺たち、甲子園を目指すのをやめよう」
誰も何も言わなかった。
乃村だけが与座を厳しく見つめていた。
与座が続ける。
「別に解散するって意味じゃない。これからは、甲子園を目標にするのをやめるってことだ。練習はこれまで通り続ける。俺たちは俺たちらしく、楽しく野球をやろう」
そういうことかと部員たちに安堵の表情が戻った。別に気持ちの問題で、これまでと何も変わらないってことだ。そんな認識が部員たちの間に広がった。ただ一人、乃村を除いて——。
「じゃあ何を目標に練習するんだ？」
乃村が訊いた。
「楽しくやる」
「楽しく？」
「ああ。それが俺たちの野球だろ」
他の部員たちもようやく口を開いた。そうだ、野球を楽しもうぜ、などと明るい声で。それがかえって乃村の怒りに火を点けた。
「お前ら分かってんのか？　甲子園を目指さないってことは、公式戦にはもう出ないってこと。つまり高野連を抜けるってことだぞ？」
乃村の言葉で部員たちは静まり返った。
「練習試合すら他の高校から相手にされなくなる。俺たちの野球は、全国から消えるんだ。それで、野球をやっている意味があるのか？」
与座は乃村の問いに力強く答えた。

「……ある。野球は楽しい。それだけでいいじゃないか。別に試合なら、他の部活の連中と対決したっていい。何人か部員を借りれば、紅白戦だって出来る」

きっと熟慮に熟慮を重ねた結果なのだろう。今の与座の口調には大人びた迫力があった。

「いいか乃村。ウチの高校は進学校だ。みんなそれぞれ事情がある。勉強優先でいい。趣味が優先だっていい。だけど俺たちは、野球を愛する仲間だ。俺たちは俺たちらしく集まって、俺たちの野球をやろうぜ？」

他の部員が胸を熱くする中、乃村だけは鼻で笑った。

「……俺たちの野球？　それって練習から逃げてるだけだろ？」

部室の空気が凍った。与座の顔からも朗らかさが消えている。ほんの数秒なのに長い沈黙。それを破ったのは乃村自身だった。

「分かった。俺も賛成する」

意外な言葉に一同が乃村を見た。

「ただし俺はやめる。部活をじゃない」

一瞬、間があった。

「野球をだ」

そう言って乃村は鞄を背負い部室から出ていった。

＊　＊　＊

夕暮れの校門を抜けると、まだ蝉が鳴いていた。

乃村は道を歩きながらこれからのことを考えていた。

野球をやめてどうする。何がしたい。

やめてよかったのか。やめてよかったのさ。

ぐるぐると頭の中をフラストレーションが巡る。

小学校のグラウンドの脇を通り過ぎた。

ちびっ子たちが野球をやっている。

そういえば初めてホームランを打ったのは小学生の時だった。

小学校はリトルリーグ。中学校ではシニアリーグ。百四十キロ近いストレートを投げ、打席に立てば鋭いスイングで長打を量産した。チームではエースで四番。

高校は当然、全国屈指の強豪校へ行くものだと思われていた。

「乃村がいれば甲子園に行ける」
「プロだって夢じゃない」
周りが背中を押してくれた。自分でもそう思っていた。
ところが中学三年生の夏。未来を映す鏡はたった一球で割れた。
シニアリーグの全国大会。スカウトも何人か見に来ているという大事な試合。
そのほんの一幕だった。
投手として投げ終えた瞬間、肩に今まで感じたことのない激痛が走った。腕が上がらない。それでも乃村は投げ続けた。イニングが終わるまで。結果的にその無理がよくなかった。
試合が終わった後、病院で医師に言われた。
「もう投げないほうがいい」
目の前から光が消えた。ぼんやりと一点を見つめるばかりで急に何も見えなくなった。誰かと顔を合わせるのすら怖くなった。
シニアの仲間たちは全国の強豪校へと散らばっていった。
おかげで地元には仲間がほとんど残らなかった。だから地元の高校に入った。
野球部があることすら知らなかった超弱小校。それでも野球部に入った。今さら他の部活を始めてまた高額な道具を揃えてもらうのは家族に申し訳ない。そんな配慮からだった。
当然のごとくエースで四番。肩をなるべく使わないセットポジションからの投げ方なら投手もいけた。
部員の半数は高校から野球を始めたばかりの素人集団。
だが練習すればもしかしたら――。
そんな針の先ほどの期待が心のどっかにあったのかもしれない。
だけど、これからは――。
誰もいない交差点で乃村は立ち止まった。
目の前の信号は青を示している。
感情が込み上げてくる。まずい。堰を切りそうだ。
その時だった。
「乃村！」
後ろから声がした。
振り返る。

与座だった。その後ろには部員たちも。
乃村は弱った顔を見せまいと前を向いた。
「もう一度、話し合おう」
後ろから与座の声。あえて振り向かず乃村は答えた。
「もう決めたんだろ」
「決めた」
「だったら来るなよ」
「ダメだ。お前一人で勝手に野球をやめるのは俺が許さない」
乃村は思わず振り向いた。
「お前、何様だよ」
「キャプテン様だ」
「はぁ？」
「お前だけ一方的に言ってやめられるのは俺たちの気持ちが許さないから、代表してお前に言っておきたいことがある」
与座が勢いよく言った。
「お前はそもそも、俺たちと野球をしてたのか？」
乃村は思わず目を見開いた。野球から逃げるなとか、お前は仲間だとか、想定していた言葉とは与座の一言はあまりにもかけ離れていた。
「ピッチャーのお前はいつも、相手に打たれるたびに、ああ打たれちまったなって顔をしてたよな。どうせ味方はエラーをする。自分さえ打たれなければ点は入らないのにって。そんな顔を、キャッチャーとしてずっと見てきた俺の気持ちがお前に分かるか？　あれがお前のやりたい野球か？」
「……」
「確かに俺たちは下手くそだ。高校から初めてバットを握ったやつも多い。そりゃそうだよ。本気で甲子園を目指そうなんてやつはまずウチの高校には入って来ない。じゃあなんで野球をやっているかって？　好きだからだよ。野球が。お前だってそうだろ？」
乃村は答えなかった。
「俺だって、弱いから諦めるんじゃない。みんなの野球が好きだって気持ちを、守りたいから諦めるんだ。みんなが野球から離れていく前に……」
与座は中学から野球を始めた組だった。キャプテンに名乗りを上げたのは、エ

ースの乃村がキャプテンにまでなると負担が増えると思ったからあえて立候補したと、先生から聞かされた。
「……一人にしてくれ」
乃村をそう言って、信号を渡った。

＊　＊　＊

それから数日後の放課後。
グラウンドでサッカー部と野球部の試合が行われた。
「自由に野球をやろう」
その与座たちの声掛けには、意外や意外、多くの部活から賛同の声が上がった。
審判には陸上部が協力してくれたし、他の部活や帰宅部なども含め多くの観客が集まった。
遠くで蝉が鳴いている。夏はまだ終わっていない。
試合はシーソーゲームだった。
スコアボードに両軍、数字が書き込まれていく。
そして回は9回表。野球部が矜持を見せ、11対8でリードした。
ところがその裏、ピッチャーが連打を浴びた。
あっという間にノーアウト満塁。
キャッチャーの与座はたまらずマウンドに向かった。
内野陣も集まってくる。
乃村というエース不在の野球部は、一人一回ずつ投げようという継投策を用いた。その綻びが出たのがこの9回裏。なにせ一切の投手経験が無い“教授”が投げているのだ。
「どんまいどんまい、とりあえずストライクさえ投げられれば、あとは俺たちが守るから」
与座が彼を勇気づける。星野は華奢な身体を震わせ力なくうなずいた。
するとその時ガクちゃんが呟いた。
「あれ？　あそこにいるの乃村じゃない？」
一同がガクちゃんの視線の先に目を移す。
確かにネットの裏に乃村がいた。

乃村は私服だった。一度、家に帰ったのだろう。しかし彼はここにいた。
ガクちゃんが「こっち呼ぼうよ」と提案する。
しかし与座が頭を振った。
「ここで声を掛けたらあいつは離れていく。あいつが来るのを待つんだ」
内野陣はうなずき、そこで解散した。
星野がヘンテコな構えでボールを投げる。
カキーン！
ボールがセンター前に抜ける。センターが捕球にもたついている間に二塁走者まで生還。
１１対１０。
なおもランナー一、二塁の大ピンチ。いまだにノーアウト、長打が出ればサヨナラの場面。ピッチャーを変えようにも残っているのは投手経験の無い者ばかり。もうダメだ。誰もがそう思っていた。
その時、審判からタイムがかかった。
乃村がグラウンドに入って来たのだ。察したベンチの仲間が乃村にグローブとユニフォームの上着を渡した。
乃村は上着を着ながらグラウンドに歩み寄った。
内野陣はおろか外野陣までグラウンドに駆けつける。
星野が泣きそうな顔でボールを乃村に託した。
みんなが救世主の言葉を待つ中、乃村が口を開いた。
「……三振は無理だ。打たせるぞ」
ナインはただうなずいた。
「同点までは仕方がない。外野は定位置で内野は深めに守ってくれ」
ほうぼうから「おう」と声が上がる。
もうさっきまでの弱気な空気は無い。
「しまっていこうぜ」
「おう！」
乃村の声に応えた守備陣が定位置に戻っていく。
乃村が足でマウンドを整える。
審判の一声で試合が再開される。
“いくぞ”

“おう”
眼だけで乃村と与座が会話をする。
セットポジションからの乃村のストレート。
球速こそ無いが球威はあった。
バシンッ。
与座のミットにボールが収まる。
打たせるぞと乃村は謙遜したが、星野のボールの後に乃村の速球はサッカー部には酷だった。
空振り三振でワンアウト。
次の打者も三球三振でツーアウト。
いよいよ最後のバッターだ。
彼はサッカー部の中でも今日はよく当たっている強打者だった。前の二人で多少は乃村の速球に目も慣れている。
事実、乃村の球を二球続けてファールにした。振り遅れているとは乃村の球にバットを当てたのだ。
そしてその三球目。
カキーン！
ついに乃村は打たれた。
二遊間にヒット性の打球が転がった。
“あれがお前のやりたい野球か？”
与座の言葉が乃村の脳裏をかすめる。
「ショート！」
乃村は咄嗟に叫び振り返った。
ショートのガクちゃんが飛びつく。
取った。彼のグローブに球が吸いついた。
しかし起き上がれない。どこにも投げられない。
ガクちゃんは這いつくばって、二塁ベースに手を伸ばした。
怪我をしまいとかばったのか一塁走者の足は二塁ベースに届かなかった。
「アウト！」
二塁でアウトを取ってゲームセット。野球部の勝利だ。
盛り上がる観客たち。

ナインがファインプレーをしたガクちゃんのもとへ駆け寄る。
乃村はそれをマウンドから眺めていた。
これが見たかった景色かもしれない。
乃村の顔に笑みが零れた。
新聞には載らない。
記録にすら残らない。
けれど、乃村の人生をもう一度奮い立たせるための価値ある試合だった。
与座が乃村の横に立って言った。
「これが俺たちの野球だ」
乃村はうなずいた。
諦めるという選択肢があってもいい。夢の形がちょっぴり変わるだけ。
乃村と与座もガクちゃんのもとに駆け寄り、勝利の雄叫びを上げた。

（完）